

「被爆体験を語る」（語り部小倉桂子さま）を伝える ～UNAFEI 第 168 回国際高官セミナー ACPF 広島支部プログラムから～

(公財) アジア刑政財団理事兼事務局長
(元 UNAFEI 所長) 山下 輝 年

広島支部のプログラム

当財団 ACPF は、UNAFEI の国際研修・セミナーの活動を支援しています。研修・セミナーは JICA 国際研修・セミナーの枠組みで行われており、そのプログラムの中で、東京のみならず、広島・京都での研修が組まれています。海外参加者にとっては、首都だけではなく地方の実情も知っておく必要があるからです。世界で唯一の被爆国に来たからには、広島の過去と現在の発展ぶりを見ることは何物にも代え難い経験です。

しかし、施設の訪問や視察だけでよいか？ そこで ACPF の地方支部の登場となります。数ある国内支部の中でも ACPF 広島支部は、その活躍著しいものがあります。今回のプログラムを直接見聞してきましたが、中でも特筆すべきプログラムがありました。それがタイトルの「被爆体験を語る」です。

日時：2018 年 1 月 31 日(水)17:00～18:00

場所：リーガロイヤルホテル広島 3 階「宮島」

語り部：小倉桂子さま

語り部 小倉桂子さん

小倉さんは、御年 80 歳。満 8 歳の時に広島で被爆した。1979 年に夫と死別。夫は広島平和記念資料館長・平和文化センター事務局長・市長室次長を務め、海外での広島原爆展の開催に尽力された方。その影響もあって 1980 年から、海外から広島を訪れる各界の人々の通訳・コーディネートを始め、2011 年から英語による被爆体験証言者を委嘱されている。現在は、株式会社アテンション（1990 年設立）代表者。

私は、これまで「被曝」という漢字を使ってきましたし、そのほうが正しいかと思っています。しかし、実際にお話を伺うと認識が変わりました。単に曝（さら）されたというよりも、まさに原爆投下の被害者という意味で、「被爆」のほうが相応しいのではないかと感じたのです。

語り部は他にもいらっしゃいますが、英語で直接伝えて下さるという意味では、この人を置いて他にない、と言われている方です。インターネットにも数々の情報がありますが、日本語と英語を挙げれば、代表格として次が参考になります。

- 1 「私の見たヒロシマ」（日本語）
www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/heiwabunka/pj178/Japanese/07J.html
- 2 A-Bomb Survivor's Testimony (English)
<https://www.pomona.edu/events/keiko-ogura-bomb-survivor's-testimony>

以下は、今回、私が聞き取った内容であり、不正確かも知れませんが、小倉さんの許可を得た上で、私の見聞録としてご紹介したいと思います。

涙を禁じ得ない冒頭

小倉さんは次のように切り出した。

「昨年、2017 年 10 月、米国ニューヨークに行き、約 150 名の学生を前に被爆体験を話す機会に恵まれました。学生は、近い将来、軍に所属し、いずれ紛争地に派遣されれば、敵との対峙を避けられない若者です。その体験談披露の最後で、主催者から「彼らにメッセージを」と頼まれたのです」

小倉さんは、戦地に行く運命にある彼らに何と

言えばいいのか非常に戸惑ったのですが、次のようにメッセージを残したという。

「どうか最後の最後の瞬間まで生きようとしてくれ。難しいことだけど、諦めることなく生きようとして欲しい」

そういった瞬間、大半の学生が泣き出した(cry)というのです。

私も、その英語での語りと内容に目が潤み、ハンカチで目頭を押さえたのです。私の前方に座っている参加者も、頻りに頷きながら聴いており、手で涙を拭う人もいました。

被爆者でもヒバクシャでもなく、Survivor(サバイバー)という言葉で自身を語っていましたが、私には、なるほどその用語のほうが思いが重なる気がし、最も相応しいと感じられました。

小倉さんは続けて言います。

「広島を訪ずれるということは、“悪魔を見る所に来た”というのと同じ。その悪魔の目撃者になることを意味するのです」

「何も原爆だけのことを言っているのではありません。“悪魔”とは、原爆以外の人を殺傷するあらゆる武器のことをも意味しています」

そして、ご自身が英語での語り部になった経緯を述べた後、「全世界の国々が核廃絶条約に参加して欲しい」と強く訴えた。

転じて、原爆投下から2か月後の1945年10月に撮影された爆心地付近の写真を示す。それは進駐軍が撮影した4方向からの写真を繋げてパノラマ風になったものでした。残る建物は僅かで、全てが消失したような写真です。

「8歳の私は、8月7日に、この写真と全く同じ光景をこの目で見たのです。これが銀行、ここは広島駅、その向こう側に自分はいた。その光景は忘れようとしても忘れられません」

と、小倉さんは言葉を添える。

自責の念とトラウマ

原爆直後は、大きな音と共に爆心地が一瞬にして消えて周辺は残っていたので、大地震が起きたのではないかという感じだったとも言います。しかし、そのうちに赤い炎が迫ってきて、人々が火傷や傷を負いながらも「助けてくれ!」と叫ぶ。小倉さんは更に言葉を継ぎます。

「私は子供だから何もできないのです。どうすることもできないのです。でも“なぜ助けられなかったか”と自分自身を責めてしまう。他に生き残った人たちも皆そういう思いになってしまうのです」

小倉さんが言うには、被爆の1年前は、中心地の小学校の近くに住んでいて、その小学校は壊滅し、1000m以内の人々の60%は死亡したが、父の決断で転居して広島駅のほうへ転居していたということです。

そして、どんな人が被害に遭ったかという点につき4類型を示す。

- 1 そこに住んでいた人々(住民)
- 2 その場を偶然訪れていた人々
- 3 治療に当たった人々
- 4 胎児(被爆した母が懐胎中)

直接被爆した者は、時間差はあれ、肌にピンク色やら、茶色やら、黒色の斑点が現れてきて、そうなるともう2週間ぐらいで次々に死んでいったとそうです。

黒い雨も降ってきたのも実際に経験している。

体験を語れぬ苦しみ

以上のような経験をした者は、今でこそ語り部として伝えることができるが、実は、語れない苦しみというのも経験しているという話へ続きました。

「被曝者というのは、なかなか口を開かないし、開けないものなのです。特に女性はそうです。時を経てからも“あの時、貴方はどこにいた?”と聞かれたとします。口をつぐんでしまうのです。特

に女性は・・・」

「何故って、居た場所を言えば“被爆者”と分かるわけで、女性は結婚、そして子供を産めるかどうかということに影響します。喋れるはずがありません。黙りこくるしかないのです」

小倉さんには、結婚し子供もできました。被爆から 60 年後、米国のスミソニアンへ体験談を話しに行ったとき、その小さな飛行機を見ただけで、突然、恐怖と不安感に苛まれ、泣き出したと言います。戦時中の飛行機（戦闘機）に対する恐怖がトラウマとなっていたからで、更に次のように打ち明け話をしたのです。

「実は、その泣く様子がニュースとなり、テレビ“ニュース 9”で放映されたのです。そうすると、ニュースを見た私の子供の友人が“君のお母さんだろ。君は被爆者の子だったのか？ 大丈夫か？”と聞かれ、かなり驚かれたのということです。そういうこともありました」

原爆投下の前後

8 月 5 日までは、「今日は何もない」ということが続いたと、小倉さんは言います。例えば、前々日の夜に、危ないから防空壕に入っているように言われていたが、何も起きなかった。外に出ても何も起きなかった。

前日も同じように防空壕に入っているように言われ、少し時間が経って外に出ても何も起きない。つまり、毎日毎日が「広島には何も起きない」ということを確認する日が続いていた。子供ながらに、そのように感じていたと言います。

そうしたところ、8 月 6 日午前 8 時 15 分、強い光が突然訪れた。色も何も感じないほど、全く何も見えない。それで気を失ってしばし倒れたが、意識が戻ったときは、既に夕方だと勘違いしたということです。

火傷で皮膚が垂れ下がった人もいれば、ガラス破片が突き刺さって、怪我をしている人もいた。

当時は戦時中で 13 歳の中学生も働いていて、ビルの中にいたか外にいたか、原爆の光に対して正面を向いていたか後ろを向いていたか、僅かな差でも、その影響は違ったとのこと。小倉さんの父親は偶々大きな木に隠れた形になったそうです。もちろん夥しい数の死を目の当たりにし、その火葬や埋葬も大変であった。

それでも 1946 年には再建へと向かい、1949 年には広島平和記念都市建設法が制定され、徐々に復興へ向かって進んだ。

原爆の投下直後は、広島市は「75 年は草木も生えない」と言われた。しかし、今、皆さんが実際に見たような都市になっています。それは、広島の人々の努力なくしては、あり得ない光景です。

質問がない

小倉さんは 15 分を残して「質問があればどうぞ」と、UNAFEI 参加者に語りかけたが、誰一人として手を挙げず、全く質問がない。国際舞台では必ず質問があり、それは UNAFEI も例外ではなく、海外参加者は何らかの質問をするのが常です。しかし、何度促されても質問が出ない。こんなことは初めてである。それほど、小倉さんの話に圧倒され、言葉を失ったのであろう。

すると小倉さんは、このような自体にもなれているのか、「質問がなければ、1 点だけ付け加えます」と言って、次のように述べて「語り」を終えた。

「火傷などで負傷している人には、いくら求められても水をやってはいけません。やれば死ぬのです。実際、水をやったら死んでいきました。そんなこと、当時の私は知りませんでした。他の人たち、子供たちもそうだったでしょう。」

「あるとき、大人の人から“水をくれと言われてもやってはいけません。おまえ達やってないよな”と聞かれました。私たち子供は皆、息を呑んだ感じで固まり、首を振りながら口々に“やってない”、“や

っていない」と言っていた。その光景は今でも忘れられないのです」

最後に「感謝」

語り終えた小倉さんには、海外参加者が近寄って輪ができ、互いに話しかけていた。そこでは、ねぎらいの言葉や質問が交わされ、まさに国境・人種・主義・信条を超えた人間同士の相互理解が看取れたと感じた次第です（写真右下参考）。

私も直接話すことができました。冒頭の「最後の瞬間まで生き抜いて欲しい」といところで、涙が出てきましたと言うと、小倉さんは次のように答えてくれました。

「戦場に行ったら無理な話なのよね。相手を最後の最後まで殺さない。そして自分も最後の最後まで生き抜こうとして生き抜く。それができるなら戦争はなくなるし、少なくとも戦争で人が死ぬことはないんですけどね」

小倉さん、そしてこのような素晴らしいプログラムを提供して下さった ACPF 広島支部の皆様にご心から感謝申し上げます。

(2018年2月1日 記)



UNAFEI 第 168 回国際高官セミナー参加者と語り部・小倉桂子さん（前列中央）
前列右端は ACPF 広島支部・富村和光副支部長



小倉桂子さんと談笑の輪